グリム童話における
結婚理由の変化と心理描写の変遷について

柳　　泉

1. はじめに

マックス・リュティ (Max Lüthi 1909-1991) は，メルヒェンにおける心理描写について，登場人物の「性質や感情は，話の筋の中で表現される。…メルヒェンの登場人物には感情的世界そのものが欠けている」[1] と述べている。しかしながら，グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859) の『子どもと家庭の童話集』(Kinder- und Hausmärchen 1812) に収録されているメルヒェンでは，登場人物の感情が語られている。

拙論「グリム童話における女性と結婚」と「グリム童話における男性と結婚」[2] において，女性主人公と結婚相手の男性の結婚理由を心理描写に着目して考察した。その際に対象としたメルヒェンは，『子どもと家庭の童話集』第 7 版に収録されている，女性が主人公のメルヒェンで，かつ女性主人公と結婚相手の男性の心理描写があるメルヒェン 7 話である。その結果，女性主人公の結婚理由は，3 話が「生活改善」，2 話が「好意」，「拒否 → 好意」と「拒否」[3] がそれぞれ 1 話であり，男性の結婚理由は，「好意」が 5 話と最も多く，続いて「歌声に感動」と「同情」がそれぞれ 1 話であると分類した。

女性主人公と結婚相手の男性の結婚理由をめぐっては，各版の比較考察が課題として残っている。そこで本論文では，女性主人公と結婚相手の男性の心理描写の変遷を遡ることで，男女の結婚理由に変化があったのかどうかを確認する。心理描写に関しても，初版の段階ですでに心理描写があったのか，あるいは「グリムのメルヒェンのスタイルが獲得された」[4] と言われる第 2 版からであるのかについても確認する。また，心理描写に関して書き換えや加筆があるとすれば，表現方法の傾向や特徴についても考察したい。

2. 心理描写について

前出の2つの拙論同様，本論文でも，Dornseiff(2004) による感情 (Fühlen, Affekte, Charaktereigenschaften) のグループ[5] および思考 (Das Denken) のグループ[6] に分類されている言葉と，Helbig/Buscha(1996) による発話導入動詞 (Redeeinleitende Verben) 及び思考・感情型動詞 (Verben des Denkens und Fühlens)[7] を心理描写の手掛かりとする。

先に，2つの論文の調査結果を概観する。表1に，第7版における女性主人公と結婚相手の男性の心理描写をまとめた。メルヒェンは過去形で語られているため，表中の動詞は過去形で表記している。

表1 第7版における女性主人公と男性の心理描写

女性主人公	タイトル	結婚相手の男性
gehen wollten	蛙の王様	gehen wollten
dachte ＋直接話法 sprach ＋直接話法 (gehen will)	ラプンツェル	das Herz gerührt erzählte ＋間接話法 (sein Herz bewegt)
froh	森の中の3人の小人	Mitleiden fühlte
erschrak	つぐみの髭の王様	sprach ＋直接話法 (zuliebe)
gut	白雪姫	sprach ＋直接話法 (ehren und hochachten will) voll Freude sprach ＋直接話法 (lieber)
erschrak dachte ＋直接話法 gefiel	鉄のストーブ	sprach ＋直接話法 (verhelfen will) sprach ＋直接話法 (heiraten will) führen wollte
sich freute	白い花嫁と黒い花嫁	sich verliebte

女性主人公の心理描写は，感情を表す言葉 (froh, gut, erschrecken, gefallen, sich freuen) による表現を6例，話法の助動詞 wollen による表現を1例，言う型動詞 sprechen による直接話法 (wollen) を1例，思考型動詞 denken による直接話法を2例，計10例を確認した。

一方，結婚相手の男性の心理描写は，感情を表す言葉 (voll Freude, Herz rühren, Mitleiden fühlen, sich verlieben) による表現を4例，話法の助動詞

wollen による表現を 2 例，言う型動詞 sprechen による表現では，直接話法 (wollen) を 3 例，形容詞 (lieber) と前置詞 (zuliebe) をそれぞれ 1 例ずつ，さらに erzählen による間接話法 (Herz bewegen) を 1 例，計 12 例を確認した。

3. テクスト (版) について

『子供と家庭の童話集』は，初版第 1 巻が 1812 年に，初版第 2 巻が 1815 年に出版された。第 2 版 (1819 年) 以降は 1 冊にまとまり，第 7 版 (1857 年) まで刊行されているため，7 つの版が存在する。本稿では，心理描写の変遷を確認するために，手元にある 4 つの版 (初版，第 2 版，第 3 版，第 7 版）を使用する。[8)]

4. 各版の変遷について

対象とする 7 話のメルヒェンに関して，各版の変遷を最終版の第 7 版から遡る。紙幅の関係上，第 7 版とは異なる心理描写の場合に限り，他の版からの引用を記載することにする。心理描写については，男性の心理描写は下線，女性の心理描写は二重下線，2 人が主語の心理描写は波線で示すことにする。

1)「蛙の王様」

第 7 版 : 1857

Der war nun nach ihres Vaters Willen ihr lieber Geselle und Gemahl. ..., und morgen wollten sie zusammen in sein Reich gehen. (Bd. 1. S. 38f.)

今や，王女の父の意向で，王子は王女の愛する男性であり夫であった。… 明日，2 人は一緒に王子の国へ行くつもりだった。

王女が，蛙に変身させられた王子の魔法を解いた後の場面からの引用である。王子の国へ行くつもりだった (gehen wollten) という 2 人の意思は，初版・第 2 版・第 3 版には見られなかった。したがって，今回の調査でこの心理描写が確認できたのは，第 7 版のみということになる。

2)「ラプンツェル」

第 7 版 : 1857

Da hörte er einen Gesang, der war so lieblich, daß er still hielt und horchte. ... Er

ritt heim, doch der Gesang hatte ihm so sehr das Herz gerührt, daß er jeden Tag hinaus in den Wald ging und zuhörte. (Bd. 1. S. 100)
その時，王子の耳に歌声が聞こえてきて，その歌声はとても愛らしく響いたので，王子は立ち止まって聞き耳を立てた。…王子は馬に乗って帰ったが，あの歌声にとても感動したので，毎日森へ行って耳を傾けたのだった。
第 2 版 : 1819
..., wo der Thurm stand, sah das schöne Rapunzel oben am Fenster stehen und hörte sie mit so süßer Stimme singen, daß er sich ganz in sie verliebte. (S. 53)
…その森にそびえ立つ塔のところで，(若い王子は) 塔の上の窓辺に立つ美しいラプンツェルを見て，甘い声で歌っているのを聞いて，ラプンツェルのことをすっかり好きになってしまった。

森にやって来た王子がラプンツェルの歌声を聞く場面からの引用である。第 7 版では，王子はとても感動し (das Herz gerührt)，ラプンツェルの歌声を聴くために毎日塔へやって来る。この表現は第 3 版にも存在する。第 2 版では，王子は，美しいラプンツェルの姿を見て，そしてその甘い歌声を聞いて，ラプンツェルのことが好きになる (sich verliebte) 。初版も同様である。したがって，王子の結婚理由は，初版と第 2 版では「好意」であり，第 3 版以降は「歌声に感動」である。
次は，ラプンツェルと王子の出会いの場面からの引用である。

第 7 版 : 1857
..., doch der Königssohn ... erzählte ihr, daß von ihrem Gesang sein Herz so sehr sei bewegt worden, ..., und sie sah, daß er jung und schön war, so dachte sie: »der wird mich lieber haben als die alte Frau Gothel«, ... Sie sprach: »ich will gerne mit dir gehen, ... « Sie verabredeten, daß er bis dahin alle Abend zu ihr kommen sollte; denn bei Tag kam die Alte. (Bd. 1. S. 101)
…だが王子は，…ラプンツェルの歌声にとても感動したとラプンツェルに語った。…ラプンツェルはその男性が若くて美しいのを見て，「この人はゴテルおばさんよりも私をかわいがってくれそうだわ。」と思った。…ラプンツェルは，「私は喜んであなたと一緒に行きたいと思います。…」と話した。2 人は，王子がそれまで毎晩ラプンツェルのところに来ることを

約束した。というのは，昼間はあの老女が来るからであった。
第 2 版 : 1819
..., bald aber gefiel ihr der junge König so gut, daß sie mit ihm verabredete, er solle alle Tage kommen und hinaufgezogen werden. So lebten sie lustig und in Freuden eine geraume Zeit, und hatten sich herzlich lieb, wie Mann und Frau. (S. 54)
…しかしすぐにラプンツェルはこの若い王子のことが気に入り，王子に毎日来てもらえないかと言い，王子を引き上げてあげると約束した。そうして 2 人は愉快に楽しくしばらくの間，暮らしたのだった。2 人は本当の夫婦のように心から愛し合っていた。

第 7 版では，王子の心理描写に関して，言う型動詞 erzählen によって，ラプンツェルの歌声に感動した (sein Herz bewegt) ことが間接話法で述べられている。第 3 版でも同様であるが，初版と第 2 版にはない。

第 7 版では，ラプンツェルの心理描写に関して，思考型動詞 denken によって，ラプンツェルの思考内容が直接話法で述べられている。また，言う型動詞 sprechen によって，王子と一緒に行きたい (gehen will) とラプンツェルの発言内容が直接話法で述べられている。この思考型動詞及び言う型動詞による表現は，第 3 版でも同様である。しかし第 2 版では，ラプンツェルは王子のことを気に入る (gefiel)。この表現は初版でも同様である。したがって，ラプンツェルの結婚理由は，初版と第 2 版では「好意」であり，第 3 版から「生活改善」であることが判明した。

また，第 2 版では，2 人が愉快に楽しく (lustig und in Freuden) 暮らしたことと，お互いに心から愛し合っていた (sich herzlich lieb hatten) ことも描かれているが，後者は第 2 版のみの表現である。どちらも第 3 版で削除された表現である。

3)「森の中の 3 人の小人」
第 7 版 : 1857
Da fühlte der König Mitleiden, und als er sah, wie es so gar schön war, sprach er: »willst du mit mir fahren?« - »Ach ja, von Herzen gern«, antwortete es; denn es war froh, daß es der Mutter und Schwester aus den Augen kommen sollte. (Bd. 1, S. 107)

すると王は同情し，何とも美しい娘の姿を見て，「一緒に来るつもりはないか？」と話した。「はい，心から喜んで。」と娘は答えた。というのは，娘は自分が母親や姉の目に入らなくなることが嬉しかったからだった。

王は，真冬に氷の張った川で麻糸をすすいでいる主人公に同情して(Mitleiden fühlte)，求婚する。求婚された主人公は，王と結婚すれば，意地悪な継母とその娘の目を気にしなくても良くなると喜ぶ(froh)。つまり主人公の結婚理由は「生活改善」である。主人公と王の心理描写は，第2版と第3版でも確認された。ただし，第2版では王の主人公に対する同情は，Mitleiden fühlte ではなく，mitleidig wurde である。言い回しは異なるが，心理状態は同じため，第2版における王の結婚理由も「同情」と判断する。初版には2人の心理描写はないため，王の結婚理由である「同情」も，主人公の結婚理由である「生活改善」も，第2版からのものである。

4)「つぐみの髭の王様」
第7版：1857
Die Königstochter erschrak, ... (Bd. 1, S. 295)
王女は驚いた。

父親から，物乞いと結婚させると事前に言われていた王女が主人公である。本当に物乞いと結婚することになり，王女は驚く(erschrak)。第2版と第3版も同様である。初版には，王女の心理描写はない。
続いて，王女の結婚相手である物乞いの心理描写を引用する。この物乞いは，かつて王女があざ笑った王である。

第7版：1857
Er sprach ihr freundlich zu: »fürchte dich nicht, ich und der Spielmann, der mit dir in dem elenden Häuschen gewohnt hat, sind eins: dir zuliebe habe ich mich so verstellt, ... « Da weinte sie bitterlich und sagte: »ich habe großes Unrecht gehabt und bin nicht wert, deine Frau zu sein.« (Bd. 1, S. 300)
王は王女に優しく話しかけた。「怖がらなくてもいいんだよ，私と，みすぼらしい家にお前と一緒に暮らしていたあの楽師は同じ人物で，お前のた

めを思ってしたことなんだ。…」すると王女は激しく泣いて，「私は大きな過ちを犯しました。あなたの妻でいる資格はありません」と言った。

王女のためを思って(zuliebe)は，第2版と第3版でも確認された。だたし，第2版と第3版ではzur Liebeである。こちらも心理状態としては同じであるため，第2版，第3版，第7版における王の結婚理由は「好意」であると判断する。

また，第7版では，王女は自分の非礼を泣いて詫び，反省するが，これは初版，第2版，第3版にはない。

5)「白雪姫」

第7版：1857

Da sprach er: »so schenkt mir ihn; denn ich kann nicht leben, ohne Schneewittchen zu sehen, ich will es ehren und hochachten wie mein Liebstes.« (Bd. 1, S. 309)

そこで王子は，「では，この棺を僕に譲ってくれないか。僕は白雪姫を見ずに生きていくことはできない。僕は白雪姫を一番大切なものを扱うように大切にして，敬うつもりだよ。」と言った。

初版：1812

... da bat er sie, sie mögten es ihm schenken, er könne nicht leben ohne es zu sehen, und er wolle es so hoch halten und ehren, wie sein Liebstes auf der Welt. (S. 202)

…そこで王子は小人たちに，白雪姫をプレゼントしてくれるようお願いした。白雪姫を見ずに生きていくことはできない，この世で一番愛しいものとして敬い，大切にするつもりだ，と。

王子が小人たちに，棺に入った白雪姫を譲ってくれるよう頼む場面である。第7版では，王子の白雪姫への気持ちが，言う型動詞sprechenによる直接話法の中で，白雪姫を大切にして敬うつもりだ(ehren und hochachten will)と述べられている。第2版と第3版でも同様であるが，初版では，王子の発言内容は間接話法(wolle)で述べられている。

次は，白雪姫が生き返る場面からの引用である。

1857

Der Königssohn sagte voll Freude: »du bist bei mir«, und erzählte, was sich zugetragen hatte, und sprach: »ich habe dich lieber als alles auf der Welt; komm mit mir in meines Vaters Schloß, du sollst meine Gemahlin werden.« Da war ihm Schneewittchen gut und ging mit ihm, und ihre Hochzeit ward mit großer Pracht und Herrlichkeit angeordnet. (Bd. 1, S. 310)

…王子は大喜びで,「君は僕のそばにいるんだよ。」と言った。…そして,「僕は世界中の何よりも君が好きなんだ。僕と一緒に父のお城へ行って，僕の妻になってもらいたい。」と話した。すると白雪姫は王子のことが好きになり，王子と一緒に行き，2 人の結婚式が豪華にそして素晴らしく整えられた。

初版 : 1812

Da ging es hin zu dem Prinzen, der wußte gar nicht, was er vor Freuden thun sollte, als sein liebes Schneewittchen lebendig war, und sie setzten sich zusammen an die Tafel und aßen in Freuden.

Auf den andern Tag ward die Hochzeit bestellt, ... (S. 202)

そこで白雪姫は王子のところへ行った。王子は，彼の愛する白雪姫が生き返って，嬉しさのあまりどうすれば良いかわからなかった。そして 2 人は一緒に食卓について，喜びの中で食事をした。

翌日，結婚式が催された。

第 7 版では，王子は生き返った白雪姫を見て，喜びいっぱいで (voll Freude) 白雪姫に話しかける。世界中の何よりも好きだ (lieber) という王子の白雪姫への気持ちは，言う型動詞 sprechen による直接話法の中で表現されている。白雪姫は王子のことが好きになる (gut)。第 2 版と第 3 版でも同様である。

初版は，第 2 版以降とは話の流れが異なる。白雪姫が眠っている棺がお城に運ばれ，王子の部屋に置かれる。ある時，家来の 1 人が棺を開け，白雪姫の背中を殴ると，その拍子に喉からりんごが飛び出して，白雪姫が生き返るのである。王子は愛する白雪姫 (sein liebes Schneewittchen) が生き返り，嬉しさのあまり (vor Freuden) どうして良いかわからなかった。2 人は食卓につき，喜びの中 (in Freuden) で食事をする。

王子の結婚理由は初版から「好意」であること，白雪姫の心理描写は初版にはなく，第 2 版で書き加えられた描写であるため，白雪姫の結婚理由

である「好意」は，第 2 版からであることが判明した。

6)「鉄のストーブ」

第 7 版 : 1857

Da sprach's aus dem Eisenofen: »ich will dir wieder nach Haus verhelfen und zwar in einer kurzen Zeit, ... und will dich heiraten.« Da erschrak sie und dachte: »lieber Gott, was soll ich mit dem Eisenofen anfangen!« (Bd. 2, S. 315)

その時，鉄のストーブの中から声がした。「僕は君がまた家に帰れるよう手助けするつもりだよ。…僕は君と結婚したいんだ。」すると王女は驚き，「神様，鉄のストーブと結婚なんて，私はどうすれば良いのでしょう！」と思った。

王女と王子の出会いの場面である。王子は，鉄のストーブの中に閉じ込められている。道に迷った王女を助けたい (verhelfen will)，王女と結婚したい (heiraten will) という王子の気持ちは，言う型動詞 sprechen を用いた直接話法で表現されている。王子のこの発言を受けて，王女は驚き (erschrak)，どうすれば良いのかと考える (dachte)。王女の思考内容は，直接話法で表現されている。いずれも，初版，第 2 版，第 3 版でも同様である。王子の結婚理由である「好意」と王女の「拒否」が初版からのものであることが確認された。

次に，王女が王子を救う場面である。

第 7 版 : 1857

Da guckte sie hinein und sah einen so schönen Jüngling, ach, der glimmerte in Gold und Edelsteinen, daß er ihr recht in der Seele gefiel. (Bd, 2, S. 317)

そこで王女が中を覗き込むと，1 人のあまりにも美しい若者が，ああ，金や宝石を身に着けてきらびやかな若者が見え，王女は本当に心からこの王子のことを気に入ったのだった。

王女は，初めは鉄のストーブとの結婚を拒否していたが，ストーブの中にいる美しい王子を見て，気に入る (gefiel)。初版，第 2 版，第 3 版も同様である。王子との結婚を拒否していた王女の気持ちが「好意」に変わったことは，初版からである。

最後に，王子が救出された場面からの引用である。

第 7 版 : 1857

Da sprach er: »du bist mein und ich bin dein, du bist meine Braut und hast mich erlöst.« Er wollte sie mit sich in sein Reich führen, aber sie bat sich aus, daß sie noch einmal dürfte zu ihrem Vater gehen, ... (Bd. 2, S. 317f.)

王子は，「君は僕のもの，僕は君のもの，君は僕のお嫁さんで，僕の魔法を解いてくれた。」と言った。王子は王女を彼の国へ連れて行くつもりだった。しかし王女は，もう一度父親のところへ行かせてくれと頼んだのだった。

王子の発言の後，王女は，父親のところへ行かせてくれるよう王子に請うのであるが，第 7 版では，王子の発言と王女の請願の間に，王女を彼の国へ連れて行くつもりだった (führen wollte) と王子の心情が述べられている。この助動詞 wollen を用いた王子の気持ちは，初版，第 2 版，第 3 版にはない。

7)「白い花嫁と黒い花嫁」

第 7 版 : 1857

Da ließ dieser das Bild vor sich bringen, und als er sah, daß es in allem seiner verstorbenen Frau glich, nur noch schöner war, so verliebte er sich sterblich hinein. (Bd. 3, S. 26)

そこで王は，その絵を持って来させた。王は，亡くなった彼の妻にそっくりで，妻よりもよりいっそう美しいその絵を見ると，命もいらないくらい好きになってしまった。

王は，主人公が描かれた絵を見て，主人公のことを好きになる (sich verliebte)。この心理描写は初版，第 2 版，第 3 版にも存在することから，王の結婚理由である「好意」は第 7 版まで変更されずに表現されていると考えられる。

次に，主人公の兄レギーネルが結婚の知らせを持って主人公を迎えに来る場面である。

第 7 版 : 1857

Wie Reginer mit der Botschaft ankam, freute sich seine Schwester, ... (Bd. 3, S.

26)
レギーネルがこの知らせを持ってやって来ると，妹は喜んだ。

主人公は，王との結婚を喜ぶ (sich freute)。この心理描写は初版，第 2 版，第 3 版でも確認された。主人公は，「森の中の 3 人の小人」の主人公同様，継母とその娘と暮らしており，2 人から意地悪をされていた。主人公にとって王との結婚は，継母とその娘から離れることができるため，喜ばしいものだったのである。主人公の結婚理由である「生活改善」も初版から第 7 版まで変更されていないと考えられる。

5. 結婚理由の変遷について

前章では童話集の版を遡り，女性主人公と結婚相手の男性の心理描写の変遷を確認した。それに伴って明らかになった両者の結婚理由の変遷を，次の表 2 にまとめた。

表 2　結婚理由の変遷

<table>
<tr><th>タイトル</th><th></th><th>1812</th><th>1819</th><th>1837</th><th>1857</th></tr>
<tr><td rowspan="2">蛙の王様</td><td>男性</td><td colspan="3" rowspan="2">なし</td><td rowspan="2">好意</td></tr>
<tr><td>女性</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ラプンツェル</td><td>男性</td><td colspan="2">好意</td><td colspan="2">歌声に感動</td></tr>
<tr><td>女性</td><td colspan="2">好意</td><td colspan="2">生活改善</td></tr>
<tr><td rowspan="2">森の中の 3 人の小人</td><td>男性</td><td>なし</td><td colspan="3">同情</td></tr>
<tr><td>女性</td><td>なし</td><td colspan="3">生活改善</td></tr>
<tr><td rowspan="2">つぐみの髭の王様</td><td>男性</td><td>なし</td><td colspan="4">好意</td></tr>
<tr><td>女性</td><td>なし</td><td colspan="2">拒否</td><td colspan="2">拒否（→反省）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">白雪姫</td><td>男性</td><td colspan="5">好意</td></tr>
<tr><td>女性</td><td>なし</td><td colspan="4">好意</td></tr>
<tr><td rowspan="2">鉄のストーブ</td><td>男性</td><td colspan="5">好意</td></tr>
<tr><td>女性</td><td colspan="5">拒否 → 好意</td></tr>
<tr><td rowspan="2">白い花嫁と黒い花嫁</td><td>男性</td><td colspan="5">好意</td></tr>
<tr><td>女性</td><td colspan="5">生活改善</td></tr>
</table>

結婚理由の変遷は，次の3つに分類される。

① 結婚理由に変化がない

初版，第2版，第3版，第7版と結婚理由が同じであったのは，「白雪姫」の王子，「鉄のストーブ」の王子と王女，「白い花嫁と黒い花嫁」の王と主人公の娘，5名である。

② 第2版と第3版の間で結婚理由が変化する

「ラプンツェル」の王子とラプンツェルである。この書き換えに関しては，性的な表現と関連があると考えられる。初版と第2版では，2人の結婚理由は「好意」である。初版では，服がきつくなったことをラプンツェルがゴテルおばさんに伝えたことで，妊娠が発覚する。しかし，子供向けのメルヒェンにするために，この性的な表現が第2版で次のように書き換えられる。髪の毛を使って引き上げる時，王子よりもゴテルおばさんの方がはるかに重く感じるとラプンツェルが言ったことで，王子と会っていたことがゴテルおばさんに知られてしまうのである。その後，第3版では，2人の「好意」も書き換えられる。王子はラプンツェルの「歌声に感動」し，ラプンツェルはゴテルおばさんよりもかわいがってくれそうだと考え，「生活改善」のために結婚を決める。ラプンツェルは，王子に毎晩来るように頼むのだが，それはゴテルおばさんが昼にやって来るためである。さらに第7版では，ラプンツェルは王子に，紐を持ってくるよう頼み，その紐をつなぎ合わせて塔から降りて，王子の国へ行く計画を説明する。王子に毎晩来てもらうのは，密会ではなく塔からの脱出のためなのである。このようにして徐々に「ラプンツェル」から性的な表現が消されていく過程で，2人の心理描写と結婚理由も変更された。

③ 初版では明示されず，後の版で結婚理由が明らかになる

第2版で結婚理由が明らかになったのは，「森の中の3人の小人」の王子と主人公の娘，「つぐみの髭の王様」の王と王女，「白雪姫」の主人公白雪姫の5名，第7版で明らかになったのは「蛙の王様」の王子と王女，計7名である。後の版で心理描写が加筆されたこの7名のうち，第2版で心理描写が加筆されたのは5名である。「グリムのメルヒェンのスタイルが獲得された」[9] とされる第2版で，女性主人公と結婚相手の男性の心理描写も加筆されていた。このことから，結婚をめぐる男女の心理描写もまた，「グリム特有のメルヒェンのスタイル」(der spezifisch Grimmsche

Märchenstil)[10] の 1 つに位置づけられる表現であると言えるのではないか。

6. 心理描写の表現方法の変遷について

本章では，心理描写の表現方法の変遷について考察する。心理描写の手掛かりとした言葉を，感情を表す言葉，言う型動詞，思考型動詞に分類して，男女別に各版の数をまとめたものが次の表 3 と表 4 である。

表 3　男性の心理描写の表現方法の変遷

男性	感情	言う型動詞	思考型動詞	総数
初版	1	2（直接話法）	0	3
第 2 版	3	5（直接話法）	0	8
第 3 版	4	6（直接 5, 間接 1）	0	10
第 7 版	6	6（直接 5, 間接 1）	0	12

表 4　女性の心理描写の表現方法の変遷

女性	感情	言う型動詞	思考型動詞	総数
初版	3	0	1	4
第 2 版	6	0	1	7
第 3 版	6	0	2	8
第 7 版	7	1（直接）	2	10

心理描写の変遷を調査した結果，次の 4 点が明らかになった。

① 総数 : 男女とも増加

初版と第 7 版を比較すると，男女とも心理描写の総数が増えている。男性は 4 倍，女性は 2.5 倍である。総数を比較すると，各版とも男性の方が多く，女性主人公との差は 1 ～ 2 例である。最も増えたのは，男女とも初版から第 2 版にかけてである。

② 感情を表す言葉 : 男女とも増加

初版と第 7 版を比較すると，男女ともに感情を表す言葉による心理描写の数が増えている。中でも初版から第 2 版にかけて増えており，男女それぞれ 3 倍である。各版とも女性の方が多く，最も男女差があるのは第 2 版である。

③ 言う型動詞 : 男女とも増加，男性に顕著

初版と第 7 版を比較すると，男女とも言う型動詞による心理描写の数が増えている。女性は第 7 版の 1 例しかなく，男性の方が圧倒的に多いことから，傾向として，言う型動詞による心理描写は男性特有の表現方法であると言える。男性で最も増えたのは，初版から第 2 版で，2.5 倍である。第 2 版まではsprechen と直接話法の組み合わせであったが，第 3 版では，erzählen と間接話法の組み合わせが加筆された。

④ 思考型動詞 : 女性に顕著

思考型動詞による女性主人公の心理描写は，第 2 版から第 3 版にかけて増えている。各版を通して男性には見られなかったことから，思考型動詞による心理描写は女性特有の表現方法であると言える。

7. おわりに

第 5 章で考察したように，7 話のメルヒェンにおける男女 14 名のうち 9 名の結婚理由に変化があったことを確認した。それぞれの結婚理由を裏付ける心理描写に関しても，初版の段階では半数 7 名の心理描写があったこと，さらに第 2 版で 5 名，第 7 版で 2 名の心理描写が加筆されたことを確認した。

また，心理描写の表現方法としては，男性に関しては言う型動詞による表現が，女性主人公に関しては思考型動詞による表現が特徴的であることが明らかになった。こうした特徴は，初版ですでに形成されていると言えるが，第 2 版において顕著になったことが今回の変遷を辿る調査で判明した。

思考型動詞による心理描写は，話の内容を読者に伝える語り手が登場人物の心の中を覗き込み，その人物の内面を語る手法である。今回の変遷を辿る調査では，女性主人公の内面に関しては初版から思考型動詞による心理描写が確認された。しかし男性の内面に関しては，初版にも後の版においても思考型動詞による心理描写は見られなかった。つまり語り手は，男性の心の中を覗き込むことはせず，「言う型動詞と直接話法」による客観的な叙述方法で男性の内面を述べている。この「言う型動詞と直接話法」による表現は第 2 版で大幅に増えた。こうした内面描写のスタイルから，語り手とそれぞれの登場人物との距離も見えてくる。語り手は，結婚相手の男性とは一定の距離を取って彼らの内面を客観的に語る一方で，女性主

人公の心の中を覗き込んで彼女たちの内面を語っているのである。

リュティは，「メルヒェンの語り手と聴き手の関心が，主人公の身の上に向けられている」[11]ということも述べている。語り手の関心が主人公に向けられているかどうかについてはまだ判断できる段階ではないが，聴き手の関心については，語り手の登場人物に対する距離の取り方と関係しているのではないか。本論文で対象としたグリムのメルヒェンでは，語り手は女性主人公に近づいて内面を語っている。この語り方によって，聴き手は女性主人公との心理的距離が近くなり，女性主人公に関心を持ちやすくなる。反対に，語り手は結婚相手の男性とは距離を取って内面を語っているため，聴き手と男性の距離も遠くなる。リュティが分析しているように，グリムのメルヒェンにおける心理描写は「真のメルヒェンの文体に合致しない」[12]としても，心理描写の叙述方法が，聴き手の関心に一定の影響を与えていることは確かである。

また，語り手が結婚相手の男性と一定の距離を保ちながら内面を語る手法は，第2版で顕著になった。その第2版から，『子どもと家庭の童話集』の編集はヴィルヘルムが単独で担当したと言われている。[13]このことから，本論文で調査対象となった7話のメルヒェンにおいて，編纂者であるヴィルヘルムの関心が，結婚相手の男性にではなく女性主人公に向けられているということもまた言えるのではないだろうか。

注

1) Vgl. Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Auflage. Bern 1960. S. 15.

2) 柳　泉：グリム童話における女性と結婚『リュンコイス』第52号 2019. 25～35頁

柳　泉：グリム童話における男性と結婚『リュンコイス』第53号 2020. 17～28頁

3)「拒否」と言っても，父親の意向による結婚のため，主人公には結婚しないという選択肢はなく，結婚することになる。

4) Vgl. Rölleke, Heinz: Zur Biographie der Grimmschen Märchen. In: Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819,

textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen. Hrsg. von Heinz Rölleke. 1. Auflage. Köln 1982. S. 525.

5) Vgl. Dornseiff, Franz: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. 8. Auflage. Berlin 2004. S.169-195.

6) Vgl. Dornseiff, Franz: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. 8. Auflage. Berlin 2004. S.197-217.

7) Vgl. Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. 17. Auflage. Leipzig 1996. S. 197.

8) 初版（1812年）:Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Erstdruckfassung 1812-1815. (1999)

第2版（1819年）:Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen. (1982)

第3版（1837年）:Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837). (1985)

第7版（1857年）:Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1, 2, 3. (1984)

引用の際は，ページを付記し，心理描写に関しては原文と翻訳に下線を引いて示す。翻訳は拙訳である。また，翻訳の括弧内は筆者が補ったものである。

9) Vgl. Rölleke, S. 525.

10) Ebd., S. 525.

11) Vgl. Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Anthoropologie. 2. Auflage. Göttingen 1990. S. 152.

12) リュティは，グリムの「ラプンツェル」における心理描写，「王子は苦しみで我を忘れ，絶望のあまり塔から飛び降りた」(Der Königssohn geriet außer sich vor Schmerz und in der Verzweiflung sprang er den Turm herab）を例に挙げて，「我々の定義からすると，ヴィルヘルム・グリムのこの文章は，真の民衆童話の文体に合致しない」と述べている。Vgl. Lüthi(1960), S. 101.

13) Vgl. Rölleke, S. 525.

その他参考文献

Stanzel, Franz K.: Theorie des Erzählens. 5. Auflage. Göttingen 1991.
F. シュタンツェル　前田彰一訳 : 物語の構造　岩波書店 1989.